

第 17 回
「北方領土と私たち」作文コンクール
入賞作文集



(令和4年度北方領土青少年等現地視察事業)

北方領土返還要求京都府民会議
京都府北方領土教育者会議

目次

	頁
1 発刊にあたって	1
2 実施要項	2
3 入賞作文の選考について	3
4 入賞者一覧	4
5 授賞式風景	6
6 歴代最優秀賞受賞者一覧	7
7 京都府北方領土教育者会議について	8
8 京都府北方領土教育者会議の取組状況	9
9 入賞作文	10
○最優秀賞	
京都府知事賞	南丹市立殿田中学校 塩内 京
京都市長賞	京都市立下京中学校 橋本 一華
○優秀賞	
京都府教育委員会教育長賞	南丹市立園部中学校 加藤 心菜
京都市教育長賞	京都市立下鴨中学校 畑谷 うらら
北方領土問題対策協会理事長賞	南丹市立殿田中学校 山口 采乃
北方領土問題対策協会理事長賞	京都市立二条中学校 土肥 万由子
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京丹波町立蒲生野中学校 長谷川 咲
北方領土返還要求京都府民会議会長賞	京都市立久世中学校 日野 結愛
京都新聞賞	南丹市立園部中学校 辻本 美玖
京都新聞賞	京都市立嵯峨中学校 鷓飼 青児
KBS京都賞	南丹市立殿田中学校 仲井 琴音
KBS京都賞	京都市立下京中学校 篠崎 凌汰
○佳作	
	亀岡市立育親中学校 鷓飼 わかな
	京都府立福知山高等学校
	附属中学校 羽 湊 真央
	京都府立福知山高等学校
	附属中学校 関 乃ノ香
	京都府立須知高等学校 土佐 柚結
	京都府立木津高等学校 辰村 海吏
	京都市立開晴小中学校 柴田 恵里子
	京都市立開晴小中学校 朝倉 優衣
	京都市立上京中学校 小笹 莉子
	京都市立勸修中学校 大村 芽生
	京都市立伏見中学校 廣澤 結芽

発刊にあたって

「北方領土と私たち」作文コンクールも今回で十七回を迎えることができました。この間、多くの生徒の皆さんや先生方、また関係者の皆様に深いご理解と温かいご支援をいただきましたこと、心から厚くお礼申し上げます。

さて、昨年二月二十四日には、衝撃的なことがおこりました。それは、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の始まりであり、その侵攻はまだ続いています。このようなことは決して許されるものではありません。このことは、私たちにポツダム宣言後に、旧ソ連軍が北方領土に軍事侵攻し、その地を現在に至るまでの不法占拠を始めたことを想起させます。また、武力で現状を変えようとするロシアの行動は、対話による北方領土問題の解決を目指してきた元島民や多くの日本人に深刻な影響を与えています。

さらに、ロシアは、軍事侵攻に対する日本の制裁措置に不満を示し、日ロ平和条約締結交渉を中断する声明を行いました。これは、不当な措置であり撤回されるべきものです。

このような時期であるからこそ、一日も早く北方領土返還の実現をめざす運動においては、停滞しないように知恵を出し合うことが求められています。

北方領土問題を解決することについて、厳しい状況となつているのは確かです。ただ、課題を克服するためにも、これからの担う若者にこの問題を自分のこととして考えてもらい、力強く発信してもらふことは必要です。そのひとつの場となつていのが、「北方領土と私たち」作文コンクールだと自負しております。そして、今回応募された各作品には、生徒たちの熱い思いが込められており、私たち大人は気持ち新たに読んでいくべきだとも考えます。

この北方領土問題は国と国との問題ではありますが、多くの生徒たちが作文でも述べているように、私たちが「国民一人一人の問題」「自分ごと」と捉えて、自分の考えをしっかりとつづけることが問題解決の基盤となることは間違いありません。これが、国民の世論を形成し、政府を後押しすることにつながるのではないのでしょうか。

この冊子に掲載されているように、多くの中学生・高校生たちが社会情勢を見据えて前向きな主張をしており、その輪がさらに広がれば、これほど心強いことはありません。

今回、京都府知事賞を受賞された塩内 京さんの作品は、令和四年二月に起こったウクライナへのロシアの軍事侵攻が、いまだに続くことに対しての切ない思いと、このことが元島民の返還への希望を途絶えさせてしまうかもしれないという衝撃を、当事者に思いを寄せながら自分の言葉で語っています。そして、私は北方領土についてしっかりと学び、発信していくことが、問題解決につながることを信じ、一日一日を大切にしたいとまとめていきます。

また、京都市長賞を受賞された橋本一華さんの作品は、納沙布岬を訪れたとき、北方領土の近さとロシアの不法占拠に対しての憤りを感じた経験から始まります。北方領土問題を解決することが重要だと感じ、自分の問題として「考え続ける」ことが大切だと気付いていきます。さらに学校における領土問題に関する学習は、もっと重視されるべきだとも訴えています。

ところで冒頭で述べましたように、この作文コンクールは第十七回を迎え、府内の各中学校、高等学校に一定認知されることにはなりましたが、若い世代の関心や理解を一層拡充するためには、府民会議と教育者会議の連携がより重要となってきます。関係の皆様には一層のご理解、ご支援をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

結びにあたり、応募していただいた生徒の皆さんやご指導いただいた各校の先生方に感謝申し上げますとともに、ご後援いただきました京都市、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会、京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中等高等学校連合会、独立行政法人北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局、KBS京都の皆様をはじめ、関係の皆様方に厚くお礼申し上げます、発刊の言葉とさせていただきます。

令和五年二月十一日

北方領土返還要求京都府民会議

会長 菅谷寛志
京都府北方領土教育者会議
会長 宮田功

令和4年度 第17回「北方領土と私たち」作文コンクール実施要項

- 1 趣 旨 京都の中学生や高校生等が、北方領土の現実に関心を高め、北方領土が歴史的な経過や国際法に照らして日本の固有の領土であることを正しく理解し、北方領土に対する関心を高めることを目的としてこの事業を実施する。
- 2 主 催 北方領土返還要求京都府民会議 京都府北方領土教育者会議
- 3 後 援 京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都府中学校長会、京都市中学校長会、京都府公立高等学校長会
京都府市町村教育委員会連合会、京都府私立中学高等学校連合会
(独立行政法人) 北方領土問題対策協会、京都新聞、産経新聞京都総局
KBS京都
- 4 テーマ 「北方領土と私たち」にかかわる内容であること(題名は自由)
- 5 募 集 (1) 対 象 京都府内の中学校、高等学校、義務教育学校並びに特別支援学校に在学している者
(2) 募集締切 令和4年12月9日(金)
(3) 作品規定 原稿用紙(400字詰)3枚程度
(4) 応募先 京都府北方領土教育者会議事務局
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校 今西宛 TEL 0771-84-1104
- 6 審 査 主催者において選定した審査員により審査
- 7 表 彰 (1) 賞の設定
最優秀賞 2点・京都府知事賞・京都市長賞 各1点
優 秀 賞 10点・京都府教育委員会教育長賞 1点
・京都市教育長賞 1点
・北方領土問題対策協会理事長賞 2点
・北方領土返還要求京都府民会議会長賞 2点
・京都新聞賞 2点
・KBS京都賞 2点
佳作・入選 若干点
(2) 表彰式
令和5年2月上旬
(北方領土返還要求京都府民大会会場にて表彰予定)
- 8 その他 ・応募の際は別紙の応募一覧表を添えて下さい。
・最優秀賞・優秀賞・佳作の作文は作文集に掲載されます。
・上位入賞作品は北方領土に関する全国スピーチコンテストに応募します。

問い合わせ先	京都府北方領土教育者会議事務担当 (京丹波町教育委員会 小森 誠)
	0771-84-0028

入賞作文の選考について

1 応募の状況

応募校：21校	応募点数：1,614点
---------	-------------

2 選考委員と選考基準

(1) 選考委員会の構成

氏名	役職・所属等
宮田 功	京都府北方領土教育者会議会長 (京都市教育委員会学校指導課統括首席指導主事)
平井 祐子	京都府北方領土教育者会議副会長 (南丹市立殿田中学校教頭)
野間 慎吾	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京丹波町立瑞穂中学校教諭)
小森 誠	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京丹波町教育委員会社会教育課社会教育指導員)
森 茂昭	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市総合教育センター首席指導主事)
松島 功一	京都府北方領土教育者会議運営委員 (京都市立伏見中学校教諭)
今河 慶昭	京都市立久世中学校教諭
田華 茂	京都市立下京中学校教諭
小西 将三	京都市立藤森中学校教諭
亀井 隆次	京都市立栗陵中学校教諭
松本 和久	京都府北方領土教育者会議顧問 (京丹波町教育委員会教育長)
西田 三郎	京都府北方領土教育者会議顧問 (京都府立林業大学校職員)
野村 啓介	北方領土返還要求京都府民会議事務局長
松浦 快仁	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長
土淵 誠	北方領土返還要求京都府民会議事務局次長

(2) 選考基準

- ・北方領土について正しい認識や理解に基づき記述されているか。
(正しい認識・理解の視点)
- ・北方領土問題に関心を持ち、主体的な姿勢で学ぼうとしているか。
(主体的な態度・関心・意欲の視点)
- ・北方領土問題の解決に向けて自らができることを考え、取り組もうとしているか。
(将来への展望の視点)
- ・上記の視点を持ち、読み手に共感を与える内容であるか。
(啓発資料としての価値の視点)

3 選考の結果 ・別紙の入賞者一覧のとおり

第17回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

応募校数：21校 応募作品数：1,614点

氏名	学校名	学年
最優秀賞（京都府知事賞）		
塩内 京	南丹市立殿田中学校	2年
最優秀賞（京都市長賞）		
橋本 一華	京都市立下京中学校	1年
優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）		
加藤 心菜	南丹市立園部中学校	2年
優秀賞（京都市教育長賞）		
畑谷 うらら	京都市立下鴨中学校	1年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
山口 采乃	南丹市立殿田中学校	2年
優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）		
土肥 万由子	京都市立二条中学校	3年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
長谷川 咲	京丹波町立蒲生野中学校	1年
優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）		
日野 結愛	京都市立久世中学校	1年
優秀賞（京都新聞賞）		
辻本 美玖	南丹市立園部中学校	2年
優秀賞（京都新聞賞）		
鵜飼 青児	京都市立嵯峨中学校	1年
優秀賞（KBS京都賞）		
仲井 琴音	南丹市立殿田中学校	2年
優秀賞（KBS京都賞）		
篠崎 凌汰	京都市立下京中学校	1年

※ 氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

第17回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞者

	氏 名	学 校 名	学 年
佳 作	鷓 鷓 わかな	亀岡市立育親中学校	2 年
	羽 淵 真 央	京都府立福知山高等学校附属中学校	3 年
	関 乃 ノ 香	京都府立福知山高等学校附属中学校	1 年
	土 佐 柚 結	京都府立須知高等学校	1 年
	辰 村 海 吏	京都府立木津高等学校	1 年
	柴 田 恵 里 子	京都市立開晴小中学校	7 年
	朝 倉 優 衣	京都市立開晴小中学校	7 年
	小 笹 莉 子	京都市立上京中学校	2 年
	大 村 芽 生	京都市立勸修中学校	1 年
	廣 澤 結 芽	京都市立伏見中学校	1 年
入 選	佐 藤 奈 那	舞鶴市立和田中学校	3 年
	森 日 鞠	南丹市立美山中学校	2 年
	福 井 雄 大	京都府立海洋高等学校	2 年
	川 辺 優 哉	京丹波町立和知中学校	2 年
	小 南 和 香	南丹市立殿田中学校	2 年
	赤 井 美 友	京都市立伏見中学校	1 年
	竹 内 悠 人	京都市立下京中学校	2 年
	河 野 つむぎ	京都市立久世中学校	1 年
	内 海 桃 華	京都市立嵯峨中学校	1 年
	塩 入 鼓 太 良	京都市立上京中学校	2 年

※ 氏名等には原則として常用漢字を使用しています。

※ 京都市立開晴小中学校は9年制で表示しています。

歴代最優秀賞受賞者一覧

第1回（平成18年度）～第17回（令和4年度）

	京都府知事賞	京都市長賞
1	長岡京市立長岡第二中学校 安川 愛佳	京都市立高雄中学校 寺島 千尋
2	京都府立洛北高等学校附属中学校 村上 花	京都市立堀川高等学校 藤田 紫穂
3	京都府立園部高等学校 大森 しおり	京都市立松尾中学校 杉浦 由佳理
4	京都府立園部高等学校 奥村 麻衣	京都市立嵯峨中学校 木村 瑞季
5	亀岡市立東輝中学校 加藤 優生	京都市立嵯峨中学校 卯滝 由季
6	京都府立須知高等学校 星山 紗輝	京都市立伏見中学校 中西 ひなた
7	宮津市立栗田中学校 池永 佳菜子	京都市立伏見中学校 大澤 未希
8	大山崎町立大山崎中学校 浅野 陽香	京都市立伏見中学校 岡嶋 良太郎
9	京都府立鴨沂高等学校 石田 裕貴	京都市立嵯峨中学校 田中 亜門
10	京都府立園部高等学校附属中学校 十倉 希望	京都市立嵯峨中学校 児玉 宜伸
11	南丹市立園部中学校 高屋 瞳華	京都市立嵯峨中学校 児玉 宜伸
12	南丹市立園部中学校 藤内 空菜	京都市立嵯峨中学校 宇佐美 智也
13	南丹市立園部中学校 日下部 理子	京都市立嵯峨中学校 鶴飼 瑠璃子
14	南丹市立園部中学校 米谷 カヤ	京都市立嵯峨中学校 鶴飼 瑠璃子
15	向日市立寺戸中学校 山下 青葉	京都市立嵯峨中学校 河合 玲奈
16	南丹市立殿田中学校 加藤 由奈	京都市立下京中学校 田中 珠生
17	南丹市立殿田中学校 塩内 京	京都市立下京中学校 橋本 一華

最優秀賞などの授賞式

京都府知事賞・京都府教育委員会教育長賞の授賞式

令和5年1月18日 京都府庁



西脇隆俊京都府知事、前川明範京都府教育委員会教育長から賞状が授与されました。

京都市長賞・京都市教育長賞の授賞式

令和5年1月17日 京都市役所



門川大作京都市長、稲田新吾京都市教育長から賞状が授与されました。

京都府北方領土教育者会議について

- 1 設 立 平成 18 年 3 月
- 2 設立趣旨 北方領土問題の解決のために次代を担う青少年が北方領土について関心を持ち、正しい理解を深めるために教育関係者の会を結成して諸活動を行う。
- 3 会 員 京都府内の中学校・高等学校教員等
- 4 主な取組
 - 「北方領土と私たち」作文コンクールの実施(平成 18 年度～)
 - ・第 17 回作文コンクール(応募校 21 校 応募点数 1,614 点)
 - 北方領土教育実践推進校指定事業の実施
 - ・ 2 校(活動支援経費 10 万円、授業公開、作文コンクールへの応募、教材研究等)
 - 各種研修会等への教員・生徒の派遣
 - ・ 四島交流事業(ビザなし交流)…国後島、色丹島、択捉島
 - ・ 現地視察研修会…根室市周辺
 - ・ 近畿ブロック研修会…近畿各府県
 - 北方領土に関する全国スピーチコンテストへの参加 等
- 5 組織体制 会長(1) 副会長(1) 事務局長(1) 事務局次長(1)
運営委員(若干名)

<北方領土に関する全国スピーチコンテスト入賞者(全国で 10 名)>

年 度	受賞名	氏 名	学校名
平成 25	奨励賞	岡嶋良太郎	京都市立伏見中学校
平成 26	北対協理事長賞	花阪 大輝	京都府立園部高等学校附属中学校
平成 28	審査員特別賞	高屋 瞳華	南丹市立園部中学校
平成 29	奨励賞	藤内 空菜	南丹市立園部中学校
令和元	審査員特別賞	上山 莉奈	南丹市立園部中学校
令和 2	北対協理事長賞	日下部佳子	南丹市立園部中学校
	奨励賞	河原 奈那	南丹市立園部中学校
	奨励賞	山下 青葉	向日市立寺戸中学校
令和 3	審査員特別賞	八木梓緒音	南丹市立園部中学校
	審査員特別賞	岸本まりな	亀岡市立亀岡川東学園
	奨励賞	久保田美優	南丹市立園部中学校
	奨励賞	田中 珠生	京都市立下京中学校

京都府北方領土教育者会議の取組について

1 「北方領土と私たち」作文コンクールへの応募校数・応募作品数

第1回	20校	404点		第10回	22校	1,471点
第2回	25校	895点		第11回	18校	1,302点
第3回	33校	1,938点		第12回	24校	1,448点
第4回	20校	1,304点		第13回	21校	1,591点
第5回	24校	1,979点		第14回	21校	1,511点
第6回	15校	1,481点		第15回	23校	1,429点
第7回	18校	1,430点		第16回	22校	1,715点
第8回	18校	1,740点		第17回	21校	1,614点
第9回	18校	1,545点				

2 各種研修会への参加状況

(参加者実績：教員数+生徒数)

年度	北方四島交流	教育指導者研修 (根室市)	青少年等視察研修 (根室地域)	近畿ブロック研修会 (6府県)
平24	国後3	2		17(滋賀)
25		2	28	43(京都)
26		2		22(大阪)
27	国後2、択捉1	2	20	18(兵庫)
28		2		9(奈良)
29		2		18(和歌山)
30	択捉1	2	20	14(滋賀)
令1		2		48(京都)
2	新型コロナウイルス感染症のため中止			
3	新型コロナウイルス感染症のため中止			4(兵庫) オンライン
4	未実施	未実施	23	15(奈良)

3 実践推進校事業指定校

年度	学校名
平成19	園部高校
	八条中学校
20	園部高校
	伏見中学校
21	園部高校
	大枝中学校
22	東輝中学校
	山科中学校
23	東輝中学校
	嵯峨中学校
24	日置中学校
	西賀茂中学校

年度	学校名
25	南桑中学校
	烏丸中学校
26	城北中学校
	中京中学校
27	和知中学校
	上京中学校
28	蒲生野中学校
	梅津中学校
29	園部中学校
	北野中学校
30	殿田中学校
	桂川中学校

年度	学校名
令和元	亀岡川東学園
	双ヶ丘中学校
2	八木中学校
	開晴小中学校
3	瑞穂中学校
	久世中学校
4	殿田中学校
	二条中学校

入賞作文

一日一日を大切に

南丹市立殿田中学校
二年 塩内 京

「一日一日を大切に」

これまで何度となく口にし、耳にしてきた言葉だ。でも、それがどんなに大きな意味を持つものなのか、初めてわかったように感じている。北方領土にかつて住んでおられた方々やウクライナの人たちのことを知ってからだ。

二〇二二年二月。衝撃的な出来事を伝えるニュースが流れた。ロシアがウクライナに対して攻撃を始めたのだ。その時には、まさかこの戦争が今のように長引くと思っていなかったし、何万人も人が亡くなるなんて想像もしていなかった。というより、正直なところ「ただ遠くの国で争いが起きている。いまの時代にもこんなことがあるのか。」ぐらいにしか捉えることができていなかった。しかし、その後、この出来事が大きく取り上げられ、私の耳にも毎日新しい情報が入るようになった。子供にも被害が出ていること。人々は地下に逃げ込んでいること。国を出て避難している人がいて、日本にも来ておられること。戦争は一部の政治家や一部の人によって起こされていると思う。おそらく、両国の国民は戦争なんて望んでいないだろう。ただ普通に、当たり前の毎日を生きていただけだったと思う。その幸せをどうして奪われられないといけないのだろうか。もし、自分自身にも同じようなことが起きたら、きっと恐怖や怒り、そして悲しみが出てこないだろう。

そんな時、ウクライナの情勢について、北方領土の元島民の方が「断腸の思い」と話されたことを知った。日本がウクライナ側であることにより、

ロシアとの関係が悪くなり、戦後七十七年間も切望し続けた故郷への希望が絶たれてしまうからだ。遠く離れた場所での戦争が、こんな風に影響を及ぼしたことに私は衝撃を受けた。戦争によって傷つき、悲しい思いをする人は世界中に、そして日本にいたことを知ったからだ。特に元島民の方々の平均年齢は八十六、七歳。残された時間はそう長くはないかもしれない。

時計は世界中、同じ速度で時を刻む。でも本当にそうだろうか。私達が当り前に過ごす一日。明日もいつものように生き、生活する日々を誰も疑わないだろう。でもウクライナの人達はどうかだろう。家族は、仲間は生きていられるだろうか、自分は明日も生きていられるだろうかという不安や恐れがいつぱいで、地獄のような一日はとても長く感じるのではないだろうか。そして、北方領土の元島民の方々が過ごしてきたのは、希望と落胆の繰り返しの日々だ。そんな中で起こったウクライナの問題。自分に残された時間はあまりにも少ない。もう帰れないかもしれない。焦燥感にかられる一日は、とても短く感じていらっしやるのかもしれない。

同じ時間を同時に生きているのに、多くの場合、人は他人の苦しみに無関心だ。そのことが更に人々を苦しめ、悲しみを深くしていると私は思う。でも、周囲の関心が薄く、不安に襲われる日々の中にあっても、顔も知らない誰かが自分達の事を知ってくれている。このことだけでも、彼らを孤独感から少しでも救うことになるのではないだろうか。

私は、人にされて嫌な事は人にしないのと同様、してもらってうれしい事は人にもしようと思っている。たった一人でも、私は北方領土について学び、それを発信していきたい。そして、私達には想像もできないような苦しみの中にいる人達に「知ってくれている人がいる」「共に考えている人がいる」と安心してもらえるよう、毎日を安心の中で過ごしてもらえよう。一日一日を大切に、少しずつでも歩んでいきたい。

北方領土と私たち

京都市立下京中学校

一年 橋本 一華

私が、札幌に暮らしていたときに、根室市にある納沙布岬まで旅行したことがある。片道約四五〇キロメートルあり、休憩を含めると車で約八時間だが、目的は北方領土を見ることだった。

島国である日本では、「国境」というものを感じる機会は少ない。当時小学三年生だった私だが、授業で北方領土についてはよく学んでいた。だから、何となくイメージはついていたらつもりだった。

車からまず見えたのは、広がる青い海。そしてそこには、朝日に照らされた歯舞群島があった。思っていたよりも近かったことに、驚いたことを覚えている。あそこが、ロシアに占領されていると考えると、不思議だった。「近いような、遠いような」そんな感覚を覚えた。

北方領土は、択捉島、国後島、色丹島、そしていくつかの島が集まった歯舞群島からなる。第二次世界大戦終戦時に、当時のソビエト連邦が侵攻し、現在に至るまでロシアが法的根拠なく占拠し続けている島々だ。北方領土に関しての日本側の主張は、「日本固有の領土であり、現在はロシアに不法占拠されているが、日本に返還されるべき」というものであるのに対し、ロシア側の主張は「第二次世界大戦の戦勝国として当然の領土である。負けた日本は何も反論できない」というものである。見方や立場によって「正しさ」というのは、全く違ってくるのだと感じた。

北方領土問題が難しくなる理由の一つに、すでに北方領土にはロシアの多くの人々が生活していることが挙げられると私は思う。例えば、京都には道路が狭く、電柱が邪魔をして歩道が歩きにくいところがある。それを

解決しようとする。そのためには道路を広くすることが必要で、まず、その周辺の家を取り壊さなければならぬ。一方の利益を守ることで、他方が不利益になることがある。立場や規模は違えども、北方領土問題の難しさにも、同じことが言えるのではないかと感じている。日本側は、「北方領土に現在生活しているロシア人の住民の人権、利益及び希望は、北方領土返還後も十分に尊重していく」という考え方を示しているが、実際、それを成り立たせることは本当にできるのかというと、あまり確実なことは言えない気がする。

私が北方領土問題に向き合う中で大切にしたいのは、「考え続ける」ということだ。決して簡単でも単純でもない問題だからこそ、解決することが楽ではないからこそ、止めずに考え続けたい。「考えたって仕方がないよ。大人だって解決できていない問題なんだから。」そう言ってしまうのは容易だろうし、楽だと思う。自分たちには関係のないこととして捉えてしまえば、考えずに済むだろう。でも立場を変えて、漁師になったとしたら、北方領土の沿岸での漁業が出来ずに困るだろうことは想像がつく。

問題の解決には、話し合いでの和解がある。ただ、領土問題は世界中にあり、いつの時代も簡単には解決してこなかった。北方領土問題の解決もそう簡単でないことは言うまでもない。それでも、今は京都に住んでいる私は、考えることを止めずにいたい。

さらに、私の問題意識は、小学校や中学校の教科書に、北方領土問題をはじめとする我が国の領土問題に関する事項が、あまりにも少ないことにある。北方領土・竹島・尖閣諸島の一つ一つにスポットをもっと当て、若い世代が考える機会を増やすべきだと思っている。

北方領土のロシアの不法占拠が始まってから七十七年も経つ。だからこそ、これからも我が国の領土問題について考え続けることを、私は止めない。

今日の聞き手は明日の語り手

南丹市立園部中学校
二年 加藤 心菜

「お墓参りに行こうかね…。」
祖母が微笑みながらそう言った。

私の家では、お盆の恒例行事。大切な家族とともに毎年訪れる場所。何の代わり映えもしない「あたり前」な日常。

しかし、七十七年前、突如として幸せな日常を奪われた人たちがいる。一九四五年八月。北方領土にソ連兵が上陸した。終戦を迎え、平和な世界が訪れると安堵した矢先の出来事。ある日、突然、元島民にとっての日常が奪われてしまったのだ。そして、今もなお、自分たちが生まれ育った故郷を、自由に行き来することすらできない。それが現実だ。悲しみに暮れる日々を七十七年間も過ごしている。

「やっと生まれた故郷に足を踏み入れることができました。七十数年ぶりに島を見たとき、自然と涙が出てきました。」

ビザなし交流に参加した、択捉島の元島民の女性の言葉だ。せめて、先祖のお墓の前で手を合わせたい…。平均年齢が八十歳を超える元島民の本音なのかもしれない。

しかし、現在、これまで築き上げてきた交流の懸け橋の存続が危ぶまれている。コロナ禍であること、そして、ロシアのウクライナ軍事侵攻が背景にある。今年に入り、「少しでも近い場所ですて花をみたい」という元島民の思いから企画された海上慰霊が実現した。

やはり、私たち家族のように、先祖を思う気持ちは元島民も同じく持っているのだ。ある人は「離れていても心は一つ」と言うが、北海道の根室

市から船で行ける距離にある故郷に、自由に行くことが許されないもどかさや、悲しみを思うと心が痛む。私なら耐えられない。

先日、社会科の授業で、ビザなし交流に参加し、国後島や色丹島に行かれた先生から話を聞いた。元島民と同じように、現島民のロシア人にとっても北方領土は故郷であるという現実を知り、衝撃を受けた。北方領土は日本固有の領土である以上、返還されるのは当然。そう思っていたのだから。

しかし、もしもそうなると現島民にとっての生まれ育った大切な場所が、今度は私たち日本人に奪われることになる。それでは、歴史を繰り返しているだけで、負の連鎖を断ち切ることはできない。

授業を通して、仲間と一緒にこれからの北方領土について真剣に考えた。考えれば考えるほど、どこか他人事として捉えていた以前の私を思い出し恥ずかしくなった。私のような中学生が関心を持たず、問題の本質から目を背けてしまうことが、最大の問題であることに気づいた。それは、元島民にとって何よりも寂しくて、悲しいことではないか。

私たち日本人とロシア人、お互い見た目も違いは言語や文化も違う。国同士の難しい問題として、自分から切り離すのではなく、人と人との問題として考えよう。同じ故郷を思う心には、何ひとつ変わらないのだから。

両者のあたたかい想いに心を寄せ、ともに未来を考えるからこそ、大きな一歩につながる。一人の百歩より、百人の一步を大切にしたい。元島民の方のまっすぐな想いを、世代を超えて私が語り継いでいく。今日の聞き手は明日の語り手になれるのだから。

北方領土問題と日本、そして私達

京都市立下鴨中学校
一年 畑谷 うらら

「北方領土について学ぼうよ。それともゲームする?」と、もしこのように聞かれたら、あなたはどちらを選びますか。ほとんどの人はゲームすることを選ぶはずです。ゲームで例えてしまうのは、あまりよくないかもしれませんが、「北方領土」と聞いて、楽しそうと思う人はほとんどいないでしょう。だから、北方領土問題はあまり知られていないのです。「北海道は遠いし全然知らないし」と思ってしまう。だけど、現在も本当に、北方領土問題はリアルな問題として残っているのです。

北方領土の択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島は、昔からずっと日本固有の領土でした。現在、この四島を不法占拠しているロシア(旧ソ連)と日本は、近代になって戦争の勝敗などによって、樺太や千島列島を「受渡し」、国境を変えてきましたが、その中で一度も北方領土が日本以外の領土になったことはありません。しかし、ロシアは北方領土を不法占拠しています。日ソ中立条約を破り、第二次世界大戦が終わってから、ソ連軍は侵攻してきました。日本人の住民達は強制送還され、北海道へ追い出されました。北方領土は、その住民達の故郷であり、ご先祖様が眠っている場所であり、かけがいのない大切な島なのです。元島民の方々は、簡単に四島へ戻ることは難しい状況は、今も続いています。

そんな元島民の方々も現在は高齢者ばかりであり、故郷の島に戻ることもなく亡くなった方もいます。また、さかのぼるとロシアの不法占拠が始まって強制送還が行われたとき、栄養失調となり亡くなった方もいました。元島民の人々は、「故郷である北方領土の島に帰りたい」という想いで

す。そんな願いを私達は叶えていかなければならないはずで

す。私の曾祖母は、昔に樺太に住んでいたそうです。しかし、ロシアが北方領土を占拠したことから、四島の元島民とともに北海道へ追い出され、その後一度も帰ることなく北海道で生活したとのことです。曾祖母は、その時のことを思い出すと、とても辛かったと話していました。

北方領土問題はずっと昔に起こりました。そして、それは今でも続いています。私は今年、北方領土の隣接地域で行われた研修会に参加しました。京都から北海道まではとても遠いと感じました。だけど、根室から見えた北方領土は、肉眼でも十分に見えるほど近くにありました。北海道は日本の一部です。それと同じように、「北方領土も日本の一部ではないだろうか。」と強く意識しました。

そんな北方領土問題を解決するために、私達には何ができるでしょうか。私は、この問題はロシアだけが悪いのではないと思っています。北方領土は確かに日本の固有の領土です。しかし、これまでのロシアとの関係など、日本には少しの責任もなかったとは言えないと思っています。それでも、元島民の故郷が奪われてしまい、それが人々の大きな傷となったことは間違いありません。その傷が早くいやされるように、私達はもつと北方領土の問題を多くの人々に知ってもらうための努力が必要です。そして、私達の世代にも、「近くて遠い」北方領土の問題を身近な問題としてもらうのです。

忘れられない歴史に

南丹市立殿田中学校
二年 山口 采乃

「忘れられない歴史にするためにはどうしたらいいのだろう。」

元島民の鈴木咲子さんは、二〇二二年の夏、京都から研修に行った中学生に「この問題をもっと多くの人に伝えてほしい」と切実に語られたそう
だ。鈴木さんをそのような心境にさせていることを本当に悲しく感じた。

戦争が終わってから、突然ソ連軍が島に入ってきたとき、元島民の方々
はどんな思いだったのだろう。そして今の北方領土情勢と国際社会の様子
をどんな風感じておられるのだろう。私は、家族と北方領土について話
をしてみた。家族とこのような話をするのは初めてだったが、意外と知ら
ないことも多いことに気づき、調べながら議論し、たどり着いた意見は「感
情だけでは、北方領土の返還は厳しい。国のさらなる外交努力が必要な
のではないか」というものだった。

今現在も「あの島に帰りたい。」「行きたいときに、自由に行ける島に戻
してほしい。」と思う元島民はたくさんいる。戦争が終わって七十七年が過
ぎ、この悲しい歴史を訴え続けても、まだ願いは届いていない状況だ。そ
こに追い打ちをかけているのが、国民の「無関心」だ。このことが更に元
島民の方々の心を傷つけている。

しかし、親と話しているうちに、こうした悲しい出来事は世界中で起こ
っていることを知った。今まさに現在進行形で起こっているウクライナへ
のロシア侵攻。トルコ紛争、シリア内戦。このような問題は、私が知らな
かっただけで数多く起こっている。私は気づかないうちに「無関心」の一
人になってしまっているのではないかと考えるようになった。七十七年も

前から抱えている悲しい気持ちを知ってもらえず、関心も持ってもらえないのは、元島民の方々からしたら島に帰れないことよりも、はるかに辛いことだと思う。また、月日が経つにつれ、若い人達はこの問題を忘れていくのではないかと考えるたびに、絶望に陥っているのではないかと考えた。ロシアに北方領土の返還を訴えるには、国による外交努力が必要だ。しかし、この外交を進めていくためには、一般国民である私たちが関心を高め、課題意識を持たなければならぬ。誰かがやってくれる、国のえらい人たちがやってくれるのではない。国の政治は、私たち国民一人ひとりの考えが反映されるべきものだからだ。そして北方領土問題を「忘れられない歴史」にしていかなければならない。

北方領土問題について知っている小中学生は数少ないかもしれない。私自身も深く考えるようになったのはつい最近だ。「忘れられない歴史」にするには、「何故起きたのか」「その当時世界情勢はどうだったのか」「現在はどのような状況であるのか」など、小さいころからこれらのことを教育の中に入れていくべきだと思う。戦争によって長く続く悲しみが引き起こされるという事実がこの日本でも起こっていると学ぶことは、北方領土だけでなく、平和について学ぶ機会にもなると思う。

私はまだ中学生だ。大きなことはできないが「語り合う」ことはできる。この問題を友人、親、祖父、祖母など身近な人達と語り合うことで北方領土問題に関心を持ってくれる人が増えるかもしれない。人の考えを聞くことで、さらに考えが深まったり、新たな学びを得ることができるとも思えない。それを続けていきたい。忘れられない歴史にするために。

優秀賞(北方領土問題対策協会理事長賞)

元島民の方の思いを知って

京都市立二条中学校
三年 土肥 万由子

私はこの夏、北方領土青少年等現地視察事業に参加し、北方領土をこの目で見た。ここから見えているのに、手を伸ばせば届きそうなのに。それは遠い遠い島。あなたは、本当の北方領土を知っているだろうか。そこには幸せな日常があった。家族や友達と暮らす今と変わらない平和な日常。そんな日常はいともたやすく壊されてしまった。

死んだ赤ちゃんを生きているかのようにおんぶして船に乗ろうとした母親。入院しても手遅れとなって亡くなった同級生。返還を夢見て亡くなった人。故郷の島に向かって手を合わせている人。元島民の方々。その人たちはどんな思いなのだろう。辛かっただろう。悔しかっただろう。無念だっただろう。今の言葉ではきっと表せられない。平和な現代に生きる私たちには想像がつかない。

だからこそ、私はもっともつと島民の方のことが知りたい。寄り添いたい。難しい問題だからといって北方領土問題から目をそらしてはいけない。そう肌で実感したからだ。現在、元島民の方の平均年齢は約八十七歳。昔は一万七千人いたが、今はもう三分の一以下だ。いつかは0人になる。ただただ故郷に帰って懐かしいみたい。お墓参りがしたい。私たちにとっては当たり前にできることなのに、それが一番したいことなのにできないのが現状だ。

「北方領土奪還」私はそんな文字を見て悲しくなる。今までの私なら何も感じていないだろう。でも今は違う。元島民の方のお話を聞いて、本当の思いを知ることができたからだ。

「今、島に住んでいる人を追い出すことなんてしない。そんなことをしたら、昔のソ連と同じことをしていることになるから。」私は、この言葉に重さと深さ、そして、誇りを感じた。元島民の方が目指しているのは奪還ではない。現島民の方々との共生なのだ。

北方墓参りで四十二年後に上陸することができた故郷。自然は全く変わっていないなかった。でも一面野原になっていた。コンクリートの校門だけが残っていて抱きついて泣いた。墓石が捨てられていた。現島民の家を建てる土台に使われていた。この島を開拓した先祖や自分の親がどこで眠っているのか分からなかった。

京都にいたら知らなかっただろう。現島民の方との交流事業もそうだ。交流することでお互いのことを知り、分り合うことができたが、今は戦争やコロナの影響で止まっている。長年積み上げてきたことが壊れそうで怖い。しかし、北方領土について学んで、人の思いがどれだけ強いかわつたので、私は声をあげたい。

一人でも多くの人に北方領土問題を改善したいと思ってほしい。正しい事実を知ってほしい。京都で生まれ育った私だからこそ、北方領土について全然知らなかった私だからこそ伝えられることがきつとある。

でも、伝えたことも、その一瞬だけ考えてもらうのでは意味がない。そのためどんな工夫をすれば良いか。今はまだ答えが見つからない。この答えは、私自身もつと北方領土について学び、伝えて、色々と模索しながら見つけていきたい。私はその一歩を踏み出したのだから…。

「知る」は「つながる」

京丹波町立蒲生野中学校
一年 長谷川 咲

私は、根室研修を通して、一つのことについてたくさんの人が「知る」ということは、たくさんの人と「つながる」ということになると思います。

まず、私がそう思ったのは、根室研修で納沙布岬へ行って、北方領土を直接見た時です。実際に島を見て、貝殻島の灯台が思っていたよりも大きく見えて驚きました。それと同時に、「なんでこんなに大きく見えるほど近くにあるのに行けないのか」と疑問に感じました。北方領土が自分の故郷だったら、どんなにつらく悲しいことかと思いました。肉眼で見えて、一番近くて三・七kmという近い距離なのに、複雑な気持ちと悔しい気持ちにもなりました。私を感じたいいろいろなことは、きっと他の研修に参加した人も、元島民の方も同じ気持ちだと思いました。そこで、私は、たくさんの人と「気持ち」でつながることができました。

次に、私がつながりを感じたのは、学校での報告会の時です。私たちが学んだこと、感じたことを全校に報告した後、各クラスで意見交流をしました。その意見交流の時、元島民の鈴木さんや中標津町の町長さんの話で、「北方四島を、ロシアとの共存の場にしていきたい。」という考えに驚いたという意見が多くありました。実際に話を聞いた自分も同じところが印象に残りました。私は、実際に行って当事者から話を聞くという貴重な経験ができましたが、自分の経験だけにとどめず、報告をすることでみんなが同じ思いや考えを持ってくれたのだと感じました。報告会を通して、全校

のみんなが北方領土について「知る」機会になり、北方領土を知る者、向き合っていく者として、みんなと大きなつながりを得ることができたのです。

この研修を通して、もっといろんな人に北方領土問題について知ってもらい、もっと北方領土問題という一つの課題について向き合う人のつながりを大きくしたいと思いました。また、自分や全校の人たちに北方領土問題に関する関心が高くなった人が多くなったと感じたので、この多くの人に関心が一瞬のものにならないためにはどうすれば良いか、自分でも、全校でも考え、もっと北方領土問題とのかかわりを多くしたいと思いました。

この先、今回のような取組(視察)があつた時には、自分も積極的に関わりたいし、多くの人に「行ってみたい」、「もっと知りたい」となってほしいし、北方領土問題が誰もが興味をもって向き合っていく存在になってほしいと思いました。私は、北方領土問題を中心にしたつながりが大きくなればなるほど返還へと近づいていくと思います。

島が一日でも早く返還されるように、自分でできることをこれからしていきたいです。

北方領土返還への一步

京都市立久世中学校
一年 日野 結愛

「あなたは北方領土について知っていますか。」と誰かに聞かれたら、私はきつと「はい知っています。」と答えるだろう。なぜなら北方領土については授業で学習しており、島の名前や大きさ、位置は理解している。

しかしながら今回、北方領土の元島民の証言を参考に制作されたアニメーションを見て、私は「何も知らなかった」と気づかされた。当初、北方領土は日魯通好条約によって日本の領土と認められていた。その後、樺太・千島交換条約やポーツマス条約など様々な条約が結ばれた。そしていずれの条約においても、北方領土は日本の領土であるということが確認されていた。

しかし、第二次世界大戦が終了した直後、ロシアは日本との条約を無視して北方領土を占領したのだ。その時、ロシア(ソ連)は人々の民家に土足で上がり込み、銃を突き付けて金品を奪い取っていった。また多くの村民は漁や林業などの労働を強制され、毎日働かなければ配給ももらえず、食事もままならない毎日が続いていた。そんな毎日に耐え切れず、島を脱出する人もいた。終戦から二年後、引き揚げ命令が出され、乗り込んだ船は貨物船であり、毎日パンと漬物が出された。船は不衛生で栄養失調で亡くなる方もいた。幼い赤ん坊ですら海に捨てられるという信じがたい事実もあった。このことは実際に日本とロシア(ソ連)の間で起こったことなのだ。今もなお、北方領土はロシアに占領されたままであり、返還運動やビザなし渡航(現在は中断されている)が行われている。

私は、この話をもっと多くの人々に語り継がれるべきだと思う。きつと元島民の方々は、当時暮らしていた自分の故郷を奪われ「返還してほしい」と強く願っていることだろう。日本の領土にも関わらずロシアが不法に占領することは、他人の家に不法侵入して、勝手に住んでいることと同じではないだろうか。占領され、島を追い出された人々の気持ちを考えてみてください。自分の故郷なのに自由に行き来することが許されない、自分が暮らしていた場所に知らない人が勝手に住んでいたら、あなたはどのような気持ちになるだろうか。私なら絶対に嫌だ。元島民の方々はきつと今も我慢を強いられている。

私たちには何ができるのか。それは私たち若い世代が北方領土問題について関心を持つなど、自分にできることを考えることが大切だと思う。そしてそのように思う人が一人でも増えることによって、北方領土返還に一步でも近づくのだと信じたい。ニュースでも九十歳近くの方が語り部として活動を行っていると聞く。また元島民の方々の高齢化も進んでいると聞いた。せめて私たち若い世代で何かできるのかを意識し、この問題を忘れないようにしたい。そして暴力ではなく、対話を通してそれぞれの国や人が向き合い、協力してよりよい方向へと前進することを願う。

居場所

南丹市立園部中学校
二年 辻本 美玖

「居場所」とは何だろうか。私は北方領土の授業を通して深く考えさせられた。

十月に北方領土についての授業があった。授業を受けるまでは、北方領土は択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島から構成されていて、今はロシア人が住んでいることくらいしか知らなかった。正直、遠い昔の話で、私の住んでいるところからは遠い地域での出来事だから、自分には関係ないことだと思っていた。もともと日本人が住んでいたのだから、早く取り返せばいいじゃないかとも思っていた。

授業では、数年前に先生が北方領土へ行かれたときの話をされた。現地で見えたもの、聞いたこと、北方領土の「今」を私達に教えてくださった。国後島ではロシアの工場から出たゴミや廃棄物は海へ捨てられ、街並みはすっかり洋風に変えられていたそうだ。色丹島では、不法投棄されたたくさんゴミが化学反応を起こし、煙を出していた。ロシア人が北方領土の自然環境を滅茶苦茶にしている様子を見て私は腹が立った。北海道から三七キロメートル。見えるのに行くことができないう元島民の気持ちを考えると本当に心が苦しくなった。ロシア人は悪いやつだ。日本固有の領土であるにもかかわらず、不法占拠をし、たくさんものを略奪した。元島民の人は大切な物、人を失っただろう。ロシア人なんて早く追い出してしまえばいいのに……そう思った。

しかし、その考えは授業の最後には変わっていた。なぜ北方領土問題が解決されないのか、それはロシア人にとって、四島は「居場所」。まぎれも

なく故郷なのだ。もし無理矢理にでも北方領土を取り返すならば、七十七年前の繰り返しになり、島民は行き場を失う。だからいつまでも解決できない問題だと分かった。また、ロシア人の中には「日本は先進国だから友好関係を持ちながら協力し合いたい。」「四島には豊かな自然があり、日本には素晴らしい技術、医学があるから、お互い協力できることがある。」と考えている人もいる。ロシア人の中には北方領土問題について、前向きに考えている人がいることも、様々な資料を調べていく中で分かった。

私は北方領土問題を少しでも解決に近づけるためには、元島民の人々の辛い思い、現島民の思いをお互いに理解し合うことが重要だと思う。もし自分が元島民だったら、大切な人や宝物にしていたものを奪われるととても苦しい気持ちになるし、生きる希望さえ失ってしまうかもしれない。でも、もし自分が現島民の立場なら、自分の大好きな故郷から追い出されるとなると耐えられない。

今は北方領土返還要求運動が行われている。メディアで重要テーマとして取り上げたり、署名活動を行っている。また、ビザなし交流といって平成四年から日本人と四島に住むロシア人が互いに訪問する取組が行われている。平成四年には六回だった交流が、令和元年には十七回にも増えている。私はこれらの事業こそが解決のカギだと思う。私にできることは何か。この作文を通じて考えること。そして一人でも多くの人と考えを共有し広げること。それがこういった事業を後押しし、可能性を大きくするはずだ。

「居場所」とは安心できる場所。幸せでいられる場所。戦争を経験した人の大半は亡くなられている。だからこそ、これからは私が戦争の恐ろしさや残酷さ、平和であることの幸せ、「居場所」があることの重要性を後世へ語り継いでいきたい。

返還後の問題

京都市立嵯峨中学校
一年 鶴飼 青児

北方領土問題をネットや本で調べると必ずと言っていいほど「北方領土を返せ」や「北方領土返還要求運動」などの単語や標語が出てきます。これらは北方領土を返してほしいというたくさんの人々の願いであり、私も北方領土を返してほしいと思っています。しかし、もし日本に北方四島が返還されたとき、人々は北方領土の自然や文化を守っていただけるのでしょうか。

北方領土とは北海道本島の北東に位置する島々です。一九四五年にロシアに占領され、いまだ返還はされていません。その面積は日本の福岡県よりも大きいです。北方領土問題解決のため北方領土返還要求運動や北方四島交流事業(現在中断されている)が行われています。このような返還運動のため、国民の多くが北方領土への関心を高めつつあります。また元島民の人々は「北方領土は、祖先が三代、四代、五代にわたり血と汗、涙を流して開拓してきた地であり、私の祖父は明治時代から多楽島に定住し、十一歳まで住んでいました。」「昆布採取の時期には一家総出て働き、最高の楽しみでした。島を挙げての運動会やお祭りは懐かしい思い出です。」と語っていました。

今、日本では返還運動が行われていますが、もし返還されたら北方領土はどうなってしまうのでしょうか。私は北方領土の自然が壊され、ビルやホテルなどが建ち並びようになってしまふのではと思います。その理由は沖縄県にあります。沖縄本島は戦争に巻き込まれ、戦後二十七年間、アメ

リカの統治下にあり、一九七二年まで返還されませんでした。しかし返還されて五十年経つ今では、ビルやホテルが建ち並び、さんご礁が減少しています。そのため北方領土も同じことが言えるのではないかと思えるのです。元島民の方々はビルやホテルが建ち並び、自然が壊されていく島々を見てどう思うのでしょうか。きっと変わり果てていく島々を見てがっかりするのではないのでしょうか。

北方領土問題、それは七十七年前にロシアに占領されいまだ返還されておらず国民や政府が強く返還を求め運動を行っています。返還を求めることは間違ったことではないと思いますが返還だけを考えないで、返還された後、北方領土の自然や大地、文化はどうなるのかも考えて北方領土問題と向き合っていくことが大切だと私は考えます。

思いのバトンをつなぐ

南丹市立殿田中学校

二年 仲井 琴音

思いを受け取り、思いをつなぐこと。その崇高な心と強い意思を私も持ち続けていきたい。

今年の夏、京都府の中学生たちが北海道に行き、元島民の鈴木咲子さんをはじめ、多くの方々の話を聞く機会があった。そのすべての方々が口をそろえて語られたのが「この問題を忘れないでほしい。」「多くの人たちに伝えてほしい。」というものだったそうだ。このことを知ったとき、とても心が揺れた。重い何かを受け取ったような気持ちになった。

八十六、七歳。これは北方領土にかつて暮らしていた元島民のみなさんの平均年齢だ。今の私の年齢の十四歳に、元島民の方々が「島に帰りたい」「島を取り戻したい」と思いながら過ごした七十七年の日々を足すと九十一歳にもなる。改めて途方もない時間が過ぎたことがわかる。この間、どんなに願ってもその願いが叶わなかったり、仲間が一人二人といなくなっていくことを、どんな思いでおられたのだろう。私なら心細くなり、あきらめたくなくなるかもしれない。焦り、虚しい気持ちで一杯になってしまうかもしれない。

「収容所から来た遺書」という本が映画化されたのを知った。大戦後ソ連の強制収容所で、病のため亡くなった男性の遺書が仲間によって家族に届けられた実話だ。日本語を記したものは危険だった。スパイとみなされ収容期間の延長など処罰される場合もあるからだ。だから、仲間は彼の遺書を暗記したり、書き写したものを隠して日本に持ち帰ったのだ。

もし、私ならと考えてみた。自分の命を懸けるようなものだ。できないかもしれない。ならば、彼らはどんな思いだったのだろうか。自分が仲間の遺書を預かりそれを家族に届けたいと、誰かが「思い」のバトンを届けないと、自分たちが収容所とともに過ごした日々や、大切な仲間との思い出や、遺書を書いた彼自身の思いが「なかったこと」になってしまおうと考えたのではないだろうか。

思いを受け取り、それをつないでいくためには、強い意思がないと伝え続けることはできない。これは、今まさに「次世代への継承」という意味で大きな課題を抱えている北方領土問題にもつながるものだ。些細なことしか私にはできないかもしれない。でも、元島民の方々から受け取った思いを大切に続けるために、どんなに小さなことでもいいので、北方領土のことに触れる時間を作っていきたい。また、思いのバトンをつなぐ当事者を増やすために、家族や友達など身近な人とこの問題について語り合う場を持ちたい。そして、当事者となった仲間と共に、受け取ったバトンを次の人に渡すために心を込めて伝えていきたい。強い意思を持って。

優秀賞(KBS京都賞)

北方領土問題を知って

京都市立下京中学校

一年 篠崎 凌汰

今回、「北方領土」について、三つの観点でまとめました。一つ目は、「北方領土とは何か」について。次は、「北方領土問題」について。最後は、「現在の北方領土はどうなっているのか」についてです。

一つ目の「北方領土とは何か」について説明します。

北方領土とは、日本が初めて見つけたとされている北海道の北東沖の択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島を指します。別名、北方四島とも言われています。

次は、今ニュースにもなっている「北方領土問題とは何か」について説明します。

戦前、北方四島は、日本が所有している土地でした。全部を合わせると千葉県くらいの大さきになり、一万七千人くらいの日本人が暮らしていました。しかし、第二次世界大戦が起こり、一九四五年には、ロシア(ソ連)が、日本と結んでいた日ソ中立条約を無視して侵攻を始めました。

その後、日本は無条件降伏をしましたが、ロシアは侵攻を続け、日本が降伏文書に署名した九月二日を過ぎても攻撃を止めませんでした。そして、九月五日までの間に、ロシアが北方四島を占領した結果、住んでいた日本人の島民は強制退去させられました。これが、日本とロシアの北方領土問題の始まりです。

最後は、「現在の北方領土問題がどうなっているのか」について説明します。日本は、北方領土を返してもらおうべく、ロシアとたくさんの会談を行ってきました。特に安倍晋三元首相は、ロシアのプーチン大統領と個人的

な関係を築いてきました。そして、大きく動きがあったのは二〇一八年でした。ついに日本は、ロシアに四島返還ではなく、二島の返還という条件で交渉のハードルを下げました。

しかし、ロシアは日本に歩み寄るのではなく、四島の主権はロシアに移ったと主張し続け、日本には受け入れられない条件を突きつけました。さらに、二〇二〇年には、ロシアは領土の割譲禁止をうたう憲法改正も行いました。

それ以降、現在の二〇二二年まで、北方領土は日本に返還されていません。現状として、プーチン大統領のままでは、領土の返還は難しいと考えられています。

僕は、北方領土の問題がたくさんのニュースや、新聞などで取り上げられていた理由について、今回調べてみたことで少し意味がわかるようになりました。

今、領土問題があるのは、日本だけではなく、世界で多くの国が困っています。特に、ロシアとウクライナの問題は、二月から今までニュースにもなっていますが、ウクライナの人には、生活も追われている人も多くいます。そのため、僕一人でもできる募金や、領土問題のことをたくさん知って、何かできることを考えてみたいと思います。

そして、今回は調べられなかったロシアがなぜ日本の領土を返さないのか(ロシア側の考え)ということや、こうなってしまった経緯をさらに詳しく授業などで調べてみます。

一人一人の力で希望を取り戻そう

亀岡市立育親中学校
二年 鶴鷗 わかな

「ある日突然、故郷での日常が奪われる。」

みなさんはこんな経験をしたことがあるだろうか。これについてあると答える人はほとんどいないだろう。当たり前だ。私はそう思った。でも約八十年前、「当たり前」ではなかったのだ。そして今なお、この状況が続いているのだ。

「当たり前」が奪われることの本当の辛さは元島民の方々にしか分からない。でも私が思うことは一つ、日本の領土として返してもらわなければならない。昔の地図に日本の固有の領土だという証拠が残されており、その事実を変えられないからだ。しかし、簡単ではない。現在、四島にはロシアの人々が暮らしている。その人々にとっても四島は「故郷」なのだ。四島に住んでいるロシアの人々を追い出すことは八十年前された事をするのと同じである。

誰もが楽しく暮らせる四島にするためには日本人々もロシアの人々も住める環境が必要だと思った。とは言っても言語や文化、考え方の違いに対応する必要がある。例えば、学校などは別々にしたらいいと思う。でも、この環境を生かし、お互いの言語を学ぶなどして両国の人々が交流する機会にすればいいと考えた。また、それを「二つの国の生活が体験できる島」として観光業に生かすこともできると思う。そうすることで、お互いの文化や価値観を理解し、より相手を尊重できると思う。さらに両国間の絆を深めるきっかけになるかもしれない。

なぜ約八十年の時を経てこのような悲劇が繰り返されるのか。それは自分達の利益に囚われ過ぎていたからだと考えた。また、そのような悲劇に終止符を打ち、二度と起きないようにするためにどうすればいいのか。本当に実現するためには自分達と違う所を生かすようにすればいいと思う。そして、「批判」するのではなく、どうすればいいのかを「提案」する姿勢を常に忘れてはいけないと思う。

今まで様々な活動が行われてきたが、それは全て人々の願いや希望から成り立っているのだ。つまり、これは国と国の複雑な問題でもあり、人と人が共生するための課題でもあるのだ。だから、お互いに認め合い尊重しあえる広い心を少しでも多くの人に持って欲しい。

北方領土問題の解決に向けて

京都府立福知山高等学校附属中学校

三年 羽瀨 真央

ある日、自分の故郷が突然奪われる。それってどんなに辛いだろう。今まで暮らしてきた思い出のつまった地元が好き勝手されるなんて、私なら耐えられないです。

しかし、これは世界各地で今も実際に起きています。そのうちの一つ、私たちの身近にあるものが北方領土問題です。第二次世界大戦のポツダム宣言直前、当時のソ連軍が日ソ中立条約を破って北方領土に侵攻してきました。当時、島には日本人およそ一万七千人ほどが住んでいましたが、強制的にソ連軍によって自由を奪われ、心身ともに不自由な生活を余儀なくされました。

私は授業でこの問題について習った時、ずっと住んでいた日本人を押し退けて暮らすロシア人はなんて悪い奴なんだと思いました。日本の領土を勝手に取ってはいけないのに、絶対四島返してもらわなければと思ったのを覚えています。

それからこの問題について興味を持ち、調べたりして知っていく中で、ある言葉に引っかけました。「もとは日本の領土だったから」という言葉です。確かに北方領土は日本固有の領土ですがロシアに不法占拠されました。しかし、だからといって、今ロシア人が住んでいる土地を返還しろと自国の領土にしても、それは昔ロシアが日本に対してやったことを同じ行爲ではないかと思っただけです。今住んでいる人は直接の関係者ではなく、その人たちの故郷でもありません。もしそうやって取り返したとしても、両国間の溝は無くならず、本当の解決にはつながらないと思います。

では、どうすれば両国が納得できるのでしょうか。私なりに考えた結果、島は今のままロシア人が住んで、日本人も漁業権を認められ自由に立ち入

ることができるようになればいいのではないかと結論に至りました。

元島民の方々の「なんとしても返還してほしい」という強い願いをかなえられないことは残念ですが、ウクライナ情勢もあり、日本国憲法の基本原理「平和主義」から考えてもロシアとの平和的な解決にはこの方法がベストだと思ったのです。

北方領土は豊かな海産物に恵まれています。漁業で生計を立てていた元島民は多くいますが、今や彼らの守ってきた漁場にも行けない状況です。せめて日本の領域に自由に入ることができ、資源を共同管理できるようにするとよいと思います。また、北方領土を訪問した先生から島の現状について聞いた時、日本の建物は老朽化し、お墓も十分な管理がされていない状況だったと聞きました。島はあるのに故郷に帰れず、自分の先祖の墓参りもできないなんて、私は悲しいです。

元島民のロシア人の方々の生活にも支障がなく、元島民の方々や漁業従事者の方々が安心して、島や近海を訪れることができるようにすることが最善の解決方法だと考えました。

最後に、元島民の方々は高齢で一刻も早い解決を待っています。しかし、元島民の方々は世代を重ねるうちにこの問題は終わったという認識も広まりつつあるようです。私達も北方領土問題について学校で学習しますが、自分とは関係ないと思う人が多数います。この問題が風化しないように、二国間の溝をなくして皆が幸せな暮らしを送るために、解決への行動を起こすことが大事です。

私たちは問題を知っています。そして、私はより深くこの問題について学びました。私たちは、知っていることや学んだことを伝える「情報発信者」なのです。一刻も早い解決のため、自ら何をすればいいか考え、行動を起こし、意思を表明することが私たちにできる解決への手助けではないかと私は思います。完全でなくてもいいので、みなさんもこの問題について自分の意見を持ち、行動を起こしましょう。やがて、その輪が広がり、解決につながるのではないのでしょうか。

故郷に住むために考えること

京都府立福知山高専学校附属中学校

一年 関 乃ノ香

日本には、自分の故郷に帰ることができず、辛い思いをしている人々があります。生まれ育った島を、戦争をきっかけにロシアに乗っ取られてしまった人々です。

このとき占領された四つの島を北方領土と呼ぶそうです。しかし、それらを返してもらうことはとても困難だと考えられます。

なぜなら、北方領土には豊かな資源があるからです。主に、鉱山資源、水産資源が豊富です。また、温泉もあり、スキューバダイビングにも適しているのです。世界中から観光客を集めることもできそうです。ですので、北方領土はぜひとも領有しておきたい土地と言えるでしょう。さらに、一度手にした宝物を手放す訳にはいきません。

けれども、私が難しさの一番の理由だと思うのは、日本人にも、ロシア人にも、北方四島への愛島心があるということです。もちろん、約束を破って日本の領土を利用していることは許せません。しかし、北方領土に住むロシア人に対してのインタビューなどを見ると、ロシアの人々も島に誇りを持っていて、大切にしたいと考えていることがわかります。北方領土は、日本人一万七千人とロシア人一万六千人の地元です。また、戦争の後、北方領土で生まれた子どもたちにとっては生地でもあります。自分の地元や生地を愛することに国籍は関係ありません。今は、日本人が思い出の場所を奪われた状況に置かれているけれど、だからと言って、ロシアの人々から取り上げることが得策ではないと感じます。大切なものを奪わ

れることは、誰にとっても辛いからです。

エッセイストである中山庸子さんの「いい会話とは、『意見が違う』という出発点から始まり、『協力しよう』でしめくくるもの」という言葉があります。日本とロシアの間では、これまで話し合いが行われているものの、意見の違いが強調され、なかなか進展が見られません。出された解決策としても、お互いが納得できるとは考えにくい気がします。現状はまだ、会話の出発点にありますが、これは、より良い未来をもたらすチャンスでもあるはずですが、私は、この先も両国がコミュニケーションを取り続け、協力し、北方領土という日本人とロシア人との共通の故郷を守り続けてほしいです。

これから、領土問題を抱え、社会を動かしていくのは私たちです。許せない相手であっても、相手をよく理解しようとし、「いい会話」によって物事を解決することが求められます。私たちは、一人でも多くの方が故郷で幸せに暮らせる方法を考えなければならぬと思います。そして、平和な社会と明るい未来をもたらすために行動できる大人になりたいです。

北方領土について思うこと

京都府立須知高等学校
一年 土佐 柚結

私は、北方領土のことについてよく知りませんでした。ロシアに土地を奪われて今も故郷に帰れていない人がいることは、授業で習ったので知っていますが、それ以外全く分かりませんでした。

私が北方領土について調べて思ったことは、何でロシアに土地を奪われて元々住んでいた日本人が、奴隷のように扱われないといけないのかということですか。ロシアが四島に来た時、若い女性や子供は髪を短く切り男の子のように見せて捕らえられないように隠れ、家中のものを兵隊達に盗られて、とても可哀想に思います。後から来たロシアの人に何故家や土地を盗られないといけないのか、当時島に住んでいた人も納得できなかったと思います。朝早くから夜遅い時間まで働かされて、十分な配給ももらえない、そんな生活から逃げ出さなかった島の人は、奴隷のような生活をさせられても自分たちの島を守りたかったんだと思います。

当時、北方領土に住んでいた方は、今どういう思いでいるのか調べました。

色丹島の元島民の方は、「憎たらしい。なんでこうなるんだというのもあるが、それと同じくらいに同年代の人とは国は違っても友達なんだと思うことが、この問題を動かす力の一つだと思う。」と言っておられた。島から出て長年経った今も、北方領土返還要求運動に携わっている元島民の方たちは、憎たらしいと思うのは当然のことだと思うけど、友情を育むことが北方領土問題を動かすと信じ、やっぱり故郷に帰りたいという気持ちをも

っているんだと思いました

この北方領土問題の一番の解決策は、元島民の願いでもある北方領土返還の思いを若者に伝えて、国民皆にこの問題を知ってもらうことだと思います。そしてこの問題が解決し、元島民の方たちの願い、思いを叶えてあげたいです。これからも、北方領土問題のニュースに関心をもって私たちが北方領土のためにできることをしていきたいです。

逆にロシアの方は、この問題をどう思っているのかも調べました。日本に領土を返すことに反対する人が約八十パーセントもいて、ロシア側からしたら、領土を返したくないのかもしれないけど、無理矢理土地を侵攻して返したくないのは、性格が悪い国だと思いました。

今回北方領土について考えて、元島民の方たちの心情が知れて良かったと思います。早く元島民の方たちが故郷に戻れる日が来るといいなと思います。

まずは知ることからが大切

京都府立木津高等学校

一年 辰村 海吏

北方領土問題についての課題が出た時、私は授業で少し習うだけの情報ぐらいしか知りませんでした。長い休みを利用してインターネットで色々調べたり、体験談の動画を見たりして北方領土について沢山知ることが出来ました。

私達の国、日本とロシアの間で、いまだに解決されていない問題が北方領土問題です。北海道の東に位置する北方四島の歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島が日本の領土にもかかわらず、第二次世界大戦終戦時に当時のソ連軍が侵攻し、現在にいたるまで法的根拠なく占拠し続けています。北方領土は日本人が苦勞して開拓した島で、当時は漁場や航路を開いて木材を切り出し、鉱山や牧場や水産加工場が営まれ、多くの日本人、一万七千二百九十一人が生活をしてきたそうです。この全ての日本人は故郷を追われてしまい、現在は居住する日本人は一人もいないのです。日本の領土にもかかわらず、日本人が自由に行き来することができません。二〇一六年には一万六千人を超えるロシア人が北方領土に住んでいることがわかっています。

日本政府は、北方領土問題解決のためにロシア政府に不法占拠をやめさせて平和条約を締結するための交渉を続けて来ています。例えば、北方領土に現在居住しているロシア人住民については、その人権、利益、希望は返還後も十分尊重していくこととする。などを挙げています。

その一方でロシア政府は強硬な姿勢を取り続けています。その理由とし

ては、北方領土は軍事的な要衝であることです。北方領土があるオホーツク海に弾道ミサイルを搭載した潜水艦を多数展開しています。それはオホーツク海の出入り口を監視下に置けているからです。日本に北方領土を返還するとアメリカ海軍を自由に出入りさせてしまうことになるということです。

これからも平和的な交渉やお互いに理解をし、強い意思を持って外交交渉を粘り強く行ってほしいです。故郷である島を追われた人々の平均年齢は現在八十六歳を超えています。一日も早い返還実現のためには政府だけではなく、国民も一丸となって取り組み協力することが大切だと思います。北方領土問題は、北海道だけの問題ではなく日本全体の問題であると思います。全国の若い世代に関心と理解を持ってもらうこと、SNSなどの情報発信を続けることなど、私達が想いを一つにして北方領土返還を強く願うことが、これからの外交交渉の後押しにもつながり、大きな力となると思います。私もこれから先で、この問題に力になれるようなことがあれば協力していけたらいいなと思います。今回の課題をきっかけに北方領土問題について沢山知ることが出来て、悲しい思いをされた方々が沢山いるということがわかりました。平和的に早い解決を願います。

佳作

「オストロフ・ヤポンスキヤ」

京都市立開晴小中学校
七年 柴田 恵里子

北方領土問題について知ったのは、北方領土に関する授業だ。もともとは、教科書に書かれていたことすら気づかず、択捉島以外の島の名前も、領土の歴史も知らなかった。授業内で元島民の方の話を動画を通して聞いて興味を持ち、京都府開催の北方領土の研修旅行に参加した。

実際に北海道に行ったときに、北方領土返還の署名をすることがあった。他にも北方領土を返せという看板など、京都では見ないものが町中にあって関心の高さに驚いた。

他にも、「ビザなし交流」というのも行われていた。北方四島在住のロシア人と元島民の交流事業だ。平成四年に始まり、四島在住のロシア人の中にあつた、北方領土問題の本質や日本及び日本人に対するゆがんだ認識が解消され、相互の理解が増進していた。しかし、コロナに加えてロシアのウクライナ軍事侵攻に対する日本の制裁措置にロシアが反発し、「ビザなし交流」を一方向的に停止すると発表した。

先ほど少し話したゆがんだ認識というのは、ロシアではロシアにとって都合の悪いことや領土の歴史、日本側の言い分を教えられていないから起こっている。

生まれ・育ちもロシアのアリシアさんは自身のユーチューブチャンネルで『クリル列島はロシアのものなのに、日本は狭すぎて住む場所がないので土地がほしく北方四島を返せと言っている。』と今でもそう思っているロシア人がたくさんいます。』と言っている。他にも「クリル列島の南端が

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島ですが、その四島が領土問題になつていることも知らないと思います。」と言っている。

日本でも、若い世代を中心に関心が低くなつている。

研修旅行で話してくれた元島民の鈴木さんが質疑応答の際に「返還運動に積極的に参加してほしい」と言っていらっしゃった。その言葉を思い出して返還運動や署名活動をしているところを見たら参加したい。また、語り継いでいきたい。

佳作

「私たちと北方領土」

京都市立開晴小中学校

七年 朝倉 優衣

みなさんは、北方領土について、どのくらい関心がありますか。

私が、北方領土のことを考えるようになったきっかけは二つあります。

一つ目は、小さいときにお父さんに北方領土の不法占拠について教えてもらったことです。そのとき初めて北方領土の現状について知りました。

二つ目は、夏休みに「北方領土青少年等現地視察事業」に行ったことです。視察に行ったことで、元島民の方の当時の島の様子や引き上げ体験を聞けたり、中標津町長の方に話を聞くなどの貴重な体験ができ、関心を深めることができました。

北方領土は今、ロシアに不法占拠されています。かつて日本の領土だった北方領土では、ロシア人が色丹島に三三一九人、国後島に八五六六人、択捉島に六四八〇人が住んでいます。日本は固有の領土を返してもらうために、「北方領土返還要求運動」を行っています。北方領土返還要求運動のはじまりは終戦の日の秋頃です。この年の十二月一日、連合国最高司令官マッカーサー宛に根室町長は陳情書を提出しました。これが始まりと言われています。現在では、全国各地で運動に対する関心が盛り上がり、都道府県民会議が結成され、活発な活動が展開されています。他にも、毎年二月七日を「北方領土の日」とすることを決め、この日は集会や講演会・研修会等を行っています。また、資料館やシンボル像など北方領土に関することや取組はたくさんあります。私が行った視察事業のように、中高生など若者が関心を深められる行事もあります。しかし、元島民の方は家族の

お墓参りをしたいと思っても、することができず、島に帰りたいたいと言い残し、亡くなってしまいます。そのため、島での生活や様子を知っている人が少なくなっています。

このような北方領土の現実などを知り、北方領土問題解決のため、私たちにできることはたくさんあることが分かりました。例えば、署名活動です。自分の名前を書くことで返還の一步になると思います。また、全世界が見る、SNSの活用や両親や友達に伝えることなどもできます。私たちは、元島民の方の思いを引き継いで伝えていくことが大切です。今後、自分たちができることを実践していき、次世代に伝えていくことを、していきたいです。

「近くて遠い故郷」

京都市立上京中学校
二年 小笹 莉子

普段、私たちが当たり前のように帰っている家。夏休みや年末に実家や故郷へ帰省する私たち。だが、日本の中には故郷に帰りたくても帰れない人たちがいる。それは、北方領土に住んでいた人々。なぜだろう。そう、北方領土がロシアによって不法占拠されているからだ。

一九四五年、日本がポツダム宣言を受諾したあと、ロシアが突然、北方四島に攻め込んできた。島に住んでいた人々の平穏な生活は一変した。島民の家に土足で入り込み、ものを盗んだ。しかもその手には銃が。その後ロシア兵に言われたとおりに働き、二か月くらい地獄の生活だったそうだ。家やものもすべて置き去りにし、北方領土から脱出する日が来た。船の中は脱出しようとする島の人々で溢れかえり、波が来ると投げ飛ばされそうになるほど過酷な脱出となった。実際に経験した人は「島から離れることが悲しかった。」、飼っていた犬を残していかなければならず、追いかけてくる犬の姿に涙する飼い主の姿を見て「悔しくなっていて一緒に泣いた。」と話している。

このロシアが行っている不法占拠。これは今、行われているウクライナへの軍事侵攻と同じだと私は思う。ウクライナに対しても急に攻め込み、ウクライナの住民の家や命を暴力的に奪っている。ロシアが軍事侵攻をやめないのは北方領土の時に、急に攻め込み武器などを使ったら、領土が自分のものになったからだ。ロシアは北方領土の時と同じように行えば、領土を奪うことができるかと考えていると思う。

今、世界各地が「ロシアの軍事侵攻はどうすれば止めることができるのか。」といったことを言っているが、私は少し違う考えも持っている。この現状と同じことを受けた北方領土に目を向け、北方領土問題の過去を調べてみると、きっとウクライナと同じようなことが出てくるだろう。世界各地が北方領土問題に目を向けることで、ロシアの軍事侵攻を少しでも抑えることができると思う。昔も今も起こっている戦争。また、この問題を通して、私たちがこのような作文を書いていることも若者への理解を広めていると思う。北方領土について考えることで次の世代に引き継がれ、近い将来、私たちが世間を動かす立場になった時に少しでも役に立つことがあると私は考える。

佳作

私達と北方領土

京都市立勤修中学校
一年 大村 芽生

「きーたの端は択捉！」そんなフレーズを口ずさみながら、小学校五年生の時に日本地図について覚えました。その時は何の疑いもなく、択捉島は日本の端で、日本人が住んでいるものだと思ってました。でも、北方領土問題が起きていて、ロシア人が住んでいるという事を中学校になって初めて知りました。

そんな頃、知床遊覧船が沈没して、遺体が国後島などに流れ着いたというニュースを見ました。ロシアと日本でその遺体の引き渡しをするのに時間がかかっていると知って「国後島は日本なのに何でそんなことが起こるんだらう。」と北方領土問題を初めて実感した出来事でした。その後、北方領土についての資料をじっくり読みました。北方領土にはもともと日本人が沢山住んでいました。でも、島がソ連の兵士達に不法占拠され、島から追い出されたという事が書いてありました。追い出された島民はふるさとを奪われ、自分がいつ死んでしまうのかという恐怖に毎日おびえていて、怖さと悔しさでいっぱいだっただろうと思いました。だから私は、その島民のためにも、早く北方領土を返してほしいという気持ちが湧き上がってきました。でも、今まで北方領土返還交渉について見ていくと「意志を確認しました。」や「一致しました。」「合意しました。」などの事が多くあり、あまり交渉が進んでいない事が分かりました。正直私は、「確認ばかりしていないでもっと早くすすめたらいいのに。」と思いました。でも、よく考えてみると、今までの歴史の中では領土問題が関係している戦争が何度か

起こっています。だから今回も昔のような戦争が起こらないように慎重に進めていっているのではないかと感じました。それほど複雑な問題なんだと思います。また、今北方領土に住んでいるロシア人を追い出すのも違うと思います。そうすると、日本人がやられた事と同じ事をロシアの人にもやってしまう事になるからです。

私は北方領土問題を解決するためにロシアと日本が戦争になるのは嫌です。だから、暴力的な事で解決するんじゃなくてお互いが思いやっっていく事が大切だと思っています。そして今の私に出来る事は、北方領土問題が起こっているという事を学ぶ事と、それを知らない人にも伝えることぐらいしか出来ません。でも、自分達の国の事だからみんなが少しでも関心を持って、解決につながるようにする事が大切です。

日本固有の領土

京都市立伏見中学校

一年 廣澤 結芽

「日本ほど国民が領土問題への関心が薄い国は少ない。」という先生の話聞いて、私は「確かにそうかもしれないな。」と思った。

自分自身もそうだったからだ。自分も北方領土などにあまり興味を持つたことはなかったし、「自分が何か考えても国をまたいだ大きな問題はとうすることもできない。」という決めつけが自分の中にあった。そんな問題は偉い人がどうにかするだろうと。

でも、やっぱりちよつと気になって、少し好奇心がわいて調べてみた。すると、元々「アイヌ」と呼ばれる人がいたこと、今はロシア人が暮らしていること、少し日本とロシアの話し合いがうまく進んでいた時期があったことなど、少し調べただけでたくさんさんの情報が入ってきた。自分の身近なものではなかったけれど、それだけ重要なものということがすぐに分かった。確かに北方領土はロシアのものになってはいけない。日本のすぐそこにロシアの領土があつては、今のウクライナのようになりかねないし、経済水域も減ってしまう。しかし、無理に取り返そうとすると、ロシアと揉めてしまってもこれからが心配になるだけだ。そしてその取り合いをするのは、政治に関わる人たち。では、私たち領土問題に関心が薄い日本国民はどうすればよいのか。

私は人との関わりを大切にすればよいと考える。ロシアの人も必ずしもみんながロシアの領土とすることに賛成なわけではないだろうし、私たちがどんどん仲を深めてそれが政府の人たちに伝われば、少しは私たちもそ

の問題にかかわることができるとはならないだろうか。すぐに行動に移すことはとても難しいことだし、国境を越えた問題はなおさらだ。でも、みんなが少しずつやっていけば、必ず結果は実るだろうし、良い方向に進む可能性も十分に出てくる。

私は将来、教師になりたい。そして、教師になればいろいろなことをたくさんの子供たちに教える立場になる。その時に、まだこの問題や他にもそのような問題があれば、今考えたことをその立場を利用して伝えていきたい。みんなが少しずつやっていけば何か変わるかもしれないということ、よりたくさんの人に広めて、少しでも何かに貢献できる人になりたいと思う。この領土問題も自分を新しくする第一歩にしたい。それが北方領土に懸ける私の思いだ。

第17回「北方領土と私たち」作文コンクール入賞作文集

令和5年（2023年）2月11日発行

編集・発行 北方領土返還要求京都府民会議
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府広報課内

京都府北方領土教育者会議
〒629-1116 京都府船井郡京丹波町市場丸ヶ野4
京丹波町立和知中学校内

印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入
石不動之町 677-2

